

シンフォニエッタ静岡 第79回定期公演



中原朋哉指揮シンフォニエッタ静岡



「シンフォニエッタ静岡のソリストたち」と題された定期公演。まず前半1曲目は、ハイドンの交響曲第6番「朝」。合奏協奏曲風の作品なので、ソリストの名技を聴くには恰好の曲目だ。ホールの響きの良さと相まって弦の響きが美しい。ヴァイオリン独奏も良く、チェロ、ホルンも、また賛助出演のフルートも出色の出来。バソンの面白い音色も含めて非常に美しい演奏であった。続く前半2曲目は、ストラヴィンスキー「ダンバートン・オークス」協奏曲。まさに当楽団の得意分野の作品、面



目躍如たる演奏だ。リズムの生き生きとした面白さがよく出ていて、独特の響きも面白い。それぞれソリストたちの、楽曲との相性の良さも抜群で、難曲であるこの曲の魅力をたっぷり味わわせてもらった。休憩後の後半は、モーツァルト「ジュピター」のストレータな演奏。この楽団の編成では、通常の耳には管楽器が目立って大きく聴こえるわけだが、こういう響きもこの曲の本質として有りか、と興味深く聴かせてもらった。(1月24日、三鷹芸術文化センター風のホール) (倉林 靖)